

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：34302
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26370641
 研究課題名(和文) 小学校外国語活動・国語科による複合言語教育ソリューションプログラムの開発・実践

 研究課題名(英文) Developing the solution program of plurilingual education through foreign language activities and Japanese in elementary schools

 研究代表者
 齋藤 榮二 (Saito, Eiji)

 京都外国語大学・国際言語平和研究所・客員研究員

 研究者番号：60162187
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果は次の5項目である。1. 「ことばの教育」という視点から研究協力者である小学校の教員に対する調査を実施 2. 1を手がかりに「ことばの学びアンケート」を作成し児童の問題点・ニーズを分析 3. 1・2を基に、日本語と英語の形式の違いに気づかせるための「ヘボン式ローマ字教材」をはじめとする教材を開発し、全国の小学校現場に成果を還元 4. 3を明記した国語・英語一貫シラバスを開発 5. 事前事後テストから開発した教材の効果を実証
 小学校外国語活動・国語科による複合言語教育ソリューションプログラムの開発と実践の成果を学会発表や論文の形で広く発信し、特に教材については全国の学校現場に還元することができた。

研究成果の概要(英文)：In order to develop the solution program of plurilingual education through foreign language activities and Japanese in elementary schools, five steps as follows were taken. 1. The survey was made targetted on elementary school teachers from the viewpoint of language education. 2. Questionnaires on language education were made utilizing 1, which was given to the students at the same school, a cooperator of this study, in order to clarify their problems and needs. 3. Teaching materials such as workbooks for Hepburn style roman letters were developed, and delivered to schools who desired to use. 4. Syllabus for elementary school education combining Japanese and English was developed. 5. The effects of the developed materials were proved by analyzing the results of experimental classes and pre- and post-test against the students.

研究分野：英語教育学

キーワード：ことばの教育

1. 研究開始当初の背景

小学生のことばの学びは、身体(体験)を通して知ることによって「知る働きとしての思考」が促進されることで起こる。しかし中学校以降の英語教育においては分析的指導が中心となってきたという実態を踏まえると、小学校から英語学習が開始することは、小中を通じた大きな学びの変換期ととらえることができる。英語と日本語にはことばに対する豊かな身体感覚とそれに直結した情動的反応という意味で、共通した能力が存在すると思われる。小学校段階で、複合言語教育の意義や複数のことばの教育が学びそのものを変えるという視点の研究は、日本では前例のない新しい研究である。また2020年から実施される3年生からの外国語活動及び5年生・6年生の外国語活動の教科化に係る先駆けとしての研究が必要とされている、という背景もあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小学校外国語活動・国語科による複合言語教育ソリューションプログラムを開発し実践することである。それにより、小学校で国語・英語の枠を超えた「ことばの教育」が可能であること、また児童の「ことばの学び」が促進されることを実証することである。

3. 研究の方法

(1) 「ことばの教育」という視点から、研究協力者である小中一貫宇治黄檗学園の教員に対する調査を行い、教員が感じる問題点とそこから明らかになるニーズを分析する。

(2) (1)を手がかりに、「ことばの学びアンケート」を作成し児童側についても問題点・ニーズ分析を行う。そこから小学校教員は教科の別なくあらゆる教育場面で児童のことばの学びを意識しているという結果を得、国語でのことばの学びを土台としたシラバスの必要性を明らかにする。

(3) (1)(2)を基に、小学校外国語活動・国語科が連携し、母語・英語のことばの形式の違いに気づかせるための「へボン式ローマ字教材」をはじめとする教材・タスクを開発し、希望する全国の小学校へ送付する形で研究成果を教育現場に還元する。

(4) (3)を明記した国語・英語一貫シラバス及び国語・英語一貫 Can-do リストを開発する。

(5) 研究協力者である小学校において検証授業を実施し、その検証授業と事前事後テストの分析を通して、(3)で開発した教材の効果を実証する。さらに事前事後において、全学年児童を対象に「ことばの学びアンケート

ト」「できること調査」を実施する。

(6) (5)で得た質的データ・量的データを共に分析し、(4)で開発した国語・英語一貫シラバス及び国語・英語一貫 Can-do リストの効果を実証する。

4. 研究成果

(1) 教員対象の調査

教員とのブレインストーミングの中で、ことば学びを以下のようにデザインした(図1)。

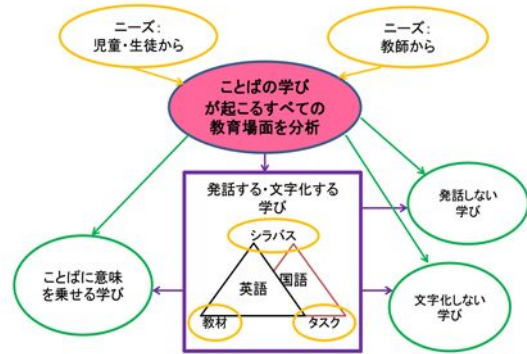


図1 ことばの学びのデザイン

研究協力校で教員研修会を実施し、その中で KJ 法などを駆使してことばの学びをどのようにとらえているかを調査したところ、教員が感じる問題点とニーズが明らかになった。

特にことばの学びが足りないと教員が感じている項目は、国語や日常の学校生活で培われると教員は考えており、国語があらゆる教科のデータベースとなるべきだという結論に達した。しかし教材・タスク・シラバスの開発については自由度の高い英語の実践に学ぶことができるため、国語・英語がデータベースとしての役割を担うという方向性が決まった(図2)。

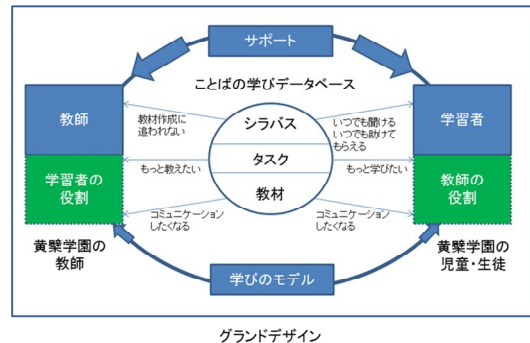


図2 教員調査のまとめ

(2) 児童対象の調査

教員から出た意見をもとに26項目からなることばの学びアンケートを作成した。身体

的共感に関連する意見は「身体的共感尺度」(林、2011)に該当するものがあつたため、「身体的共感尺度」を児童向けの表現に修正の上使用した(項目 17~26)。アンケートの参加者は、1年生から8年生(中学2年生)の8学年全クラスである。

結果から英語が国語と同じ視点で共通点を明確にした、他教科やあらゆる教育場面に応用できる「ことばの学びデータベース」の必要性が明らかになった。国語・英語に共通する教材・タスクを明らかにし、それらが明記された一貫カリキュラムを形にすれば、それをデータベースとして、他教科や様々な教育場面に応用できることを図式化した(図3)。

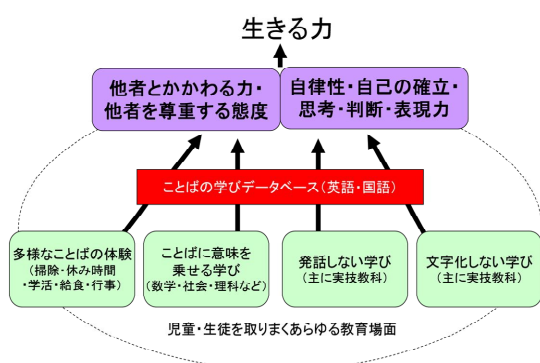


図3 あらゆる教育場面とことばの学び

(3) 教材開発

事前調査

小学3年生でヘボン式ローマ字を効果的に指導するための教材開発に先立って、小中学校教員のヘボン式ローマ字の導入に対する意識を、質問紙を使って調査することとした。事前調査の目的は、ヘボン式ローマ字導入を切望する現職教員の声が、特別な事例ではないことを実証することである。参加者は、公立小中学校の教員81名(中学校英語科教員21名、小学校教員60名)である。担当学年は小学1年生から中学3年生までが混在している。質問紙調査作成に当たっては、参考となる先行研究がなかったため、筆者が新たに項目を考案し、14項目からなる質問紙を作成した。1.「そう思わない」2.「あまりそう思わない」3.「少しそう思う」4.「そう思う」の4件法とした。中学校教員が圧倒的にヘボン式を支持していることは予想通りであったが、小学校教員も、明確な指導法さえあればヘボン式への移行を希望していることが明らかになった。

絵本

開発した教材は2種類であり、1つ目は「ヘボンさんものがたり」という題の絵本である(図4)。



図4 開発した絵本

先行研究分析から明らかになったことは、英語学習よりローマ字学習が時期的に先行するため、Roman letters(アルファベットの文字を指す。和訳して「ローマ文字」と表記されることもあるが、ローマ字との混同を避けるため、本稿ではRoman lettersと表記する)を日本語の音韻と一致させてしまう弊害があること、またローマ字は日本語のためにあるもので英語とは別物であると強調する必要があることである。そこで、言語構造が異なる英語の文字で日本語の音を表記しようとしてヘボン式ローマ字が生まれた経緯を押さえ、ローマ字は英語とは全く別物であると理解させるための教材を作ることとした。小学3年生にも理解できるよう、ヘボンさんというキャラクターを作り、彼を主人公にヘボン式ローマ字誕生までの逸話をもとにしたオリジナルの絵本を作成した。その中で、日本語と英語は音韻が異なるにもかかわらず、あくまで「近い」音になるRoman lettersを組み合わせたものがヘボン式ローマ字であること、個人名や地名を外国人にも伝えるための道具に過ぎないことを強調した。物語文作成に当たっては、実際に小学生に読み聞かせつつ理解度・反応を確認しながら、日本語の音の響きを推敲した。

練習帳

二人のキャラクターを設定し、彼らが説明をしていくという体裁の「英語学習につながるヘボン式ローマ字の練習」という題のペンマンシップを作成した(図5)。

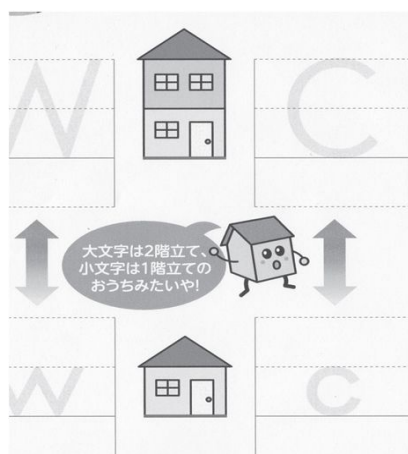


図5 キャラクターが説明する練習帳

効果の検証

A 小学校3年1組31名、B小学校3年1組31名が本研究の参加者である。A・B小学校ともに、2学期11月から12月にかけて、所要時間を統一した上でローマ字指導を行った。処置群となるA小学校では、本研究で開発した2つの教材を使用し、ヘボン式ローマ字を指導した。対照群となるB小学校では、市販の教材を使用し、訓令式ローマ字を指導した。A小学校・B小学校ともに、指導開始前、終了後にそれぞれプリテスト・ポストテスト(すべて同じローマ字テスト)を行った。両群においてポストテストのスコアが有意に高くヘボン式・訓令式ともにローマ字の習得が進んだという結果であった。

考察

本研究の目的は、日本語と英語の言語形式の違いに気づかせ、ローマ字学習をその先の英語学習につなげるため、小学3年生でヘボン式ローマ字を効果的に指導するための教材を開発することであった。事前調査で小学校教員が何を求め、何を不安に感じているかを明らかにした上で、その結果を生かしながら、絵本「ヘボンさんものがたり」・ローマ字練習帳「英語学習につながるヘボン式ローマ字の練習」を完成させた。訓令式は易しいがヘボン式は児童には難しいという懸念を払拭するため、ヘボン式を指導した処置群・訓令式を指導した対照群間のローマ字テストスコアに差がないことが、調査開始前に期待した結果であった。しかし、実際の結果は処置群のスコアが対照群を上回るという、期待を超えるものであった。「無意味なスペルを何度も書かせることに意味が感じられない」「子どもも退屈そうである」という小学校教員の声を反映し、通常の練習帳に比べ書く練習を大幅に削減したにもかかわらず、ローマ字の定着度において有意という結果を得た。この結果は、子どもにとって「ローマ字とは何のために作られ、今何のために学んでいるのか」が明確であることが、意欲・意識の向上につながり、学習を促進することを実証したとも言える。

(4) シラバス・Can-do リスト

(3)で開発した教材・それを使用したタスクをはじめとして、国語で取り扱ったものを英語でどのタイミングに取り扱うかを検討し、同じフォーマットによる国語・英語一貫シラバスを開発した(図6は1学年の例)。

図6 国語・英語一貫シラバス

また、図7のように、開発したシラバスに基づくCan-doリストを作成した。研究協力者である小中一貫校と共同研究を行っている公立高校にも依頼し、フォーマットのみ揃えて簡易なものを作成した。

図7 国語・英語一貫 Can-do リスト

これらのシラバス・Can-do リストに基づく実証授業を研究協力者である学校で実施した。実証授業は2015年4月から2016年3月という長期にわたったが、その前と後に同じ「ことばの学びアンケート」「できること調査」を全学年児童に実施し、質的データ・量的データを得ることができた。今後それらを分析することで国語・英語一貫シラバス及び国語・英語一貫 Can-do リストの効果を検証する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

山本玲子・里井久輝 (2017). 「英語と日本語のプロソディの違いに気づかせる小学生への語アクセント指導の試み: 『相手に伝わる発音』への効果」. 『英語教育研究』40, 査読有, 11-19.

山本玲子・池本淳子 (2017). 「英語学習につながるヘボン式ローマ字学習のための教材開発」 『JES Journal』17, 査読有, 38-53.

Masaki, K., Yamamoto, R., Imai, H., & Satoi, H. 2015. Comparison of syllable counting ability between second graders and fifth graders in elementary school. JASTEC Journal, 34, 査読有, 21-38.

〔学会発表〕(計3件)

山本玲子・池本淳子 (2016/8/20) 『国語・英語一貫カリキュラムおよび国語・英語一貫 Can-Do リスト開発: 公立小中一貫校における言語教育の取り組み』全国英語教育学会第42回埼玉研究大会. 於獨協大学(埼玉県草加市)

山本玲子・池本淳子・里井久輝 (2016/7/23) 『英語学習につながるヘボン式ローマ字教

材の開発と効果の検証：国語科と英語科が連携したことばの教育をめざして』第 16 回小学校英語教育学会. 於宮城教育大学（宮城県仙台市）

山本玲子・里井久輝（2016/6/12）『英語と日本語の音の違いに気づかせる小学生への指導の試み：「相手に伝わる発音」への効果』関西英語教育学会第 21 回研究大会. 於大阪教育大学天王寺キャンパス（大阪府柏原市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 榮二（SAITO, Eiji）

京都外国語大学・国際言語平和研究所・客員研究員

研究者番号：6 0 1 6 2 1 8 7

(2) 研究分担者

石川 保茂（ISHIKAWA, Yasushige）

京都外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：9 0 2 5 7 7 7 5

山本 玲子（YAMAMOTO, Reiko）

京都外国語短期大学・キャリア英語科・准教授

研究者番号：6 0 6 3 7 0 3 1

里井 久輝（SATOI, Hisaki）

龍谷大学・理工学部・教授

研究者番号：7 0 3 8 8 6 4 3